

## 英語教育におけるリーディング研究の動向と問題点

千々岩 佳 史\*

(1996年12月9日受理)

Yoshifumi CHIJIWA

Current Trends in Reading Research in English Language Teaching

### 1. はじめに

英語教育において、指導と学習に関しては、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」および「書くこと」の4技能・4領域の言語活動という言い方が通例される。「聞くこと」、「話すこと」は話し言葉を、「読むこと」、「書くこと」は書き言葉を媒介として言語活動が行なわれるので、この4技能・4領域という区分方法は、多分に便宜的方法ではあるが、私たちが英語教育について議論、考察を行なうさいには都合のよいものである。

ここで便宜的方法というのは、どれか1つの技能・領域のみを指導、学習することは、現実にはありえないからである。例えば、「読むこと」の学習においては、「聞くこと」、「話すこと」の基礎的学習がその根底をなす必須の技能であり、「読むこと」の技能は「聞くこと」、「話すこと」、「書くこと」の言語活動へと発展的に学習され、また「読むこと」の学習へとフィードバックされるのである。つまり、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」および「書くこと」の言語活動が相互作用をなしつつ、いわば、ラセン階段状に英語学習が伸長していくと考えていいであろう。

では、これら「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」および「書くこと」の4技能・4領域の各分野が同じ力点を置かれて研究されてきたかということ、そうではない。最も重点的に研究されてきたのは、「読むこと」、つまりリーディングの分野である。リーディング研究は、他とは比較にならない程の長い歴史と、学問的層の厚さを持っている。しかしながら、リーディング研究においても、平均して、まんべんなく研究がなされてきたとは言いがたい。他の学問的研究分野と同じように、ある偏向が存在するのである。では、それは、どの分野、領域であり、今後どのような研究がなされなければならないのか。

私は本稿において、現時点におけるリーディング研究の動向を概観し、問題点をあげ、それが英語教育にどのような意味を持ちうるのかを考察したい。

## 2. リーディング研究の動向

### 2. 1 ASIRR

長い研究の歴史を持つ英語リーディング研究は、当然ながら広いすそ野の上に立っている。英語学、言語学、言語心理学、実験心理学、生理学、病理学等の関連学問領域からの研究成果と知見を取り入れつつ、広範な研究分野を包含しているのである。

そのようなリーディング研究の現時点における動向を概観するには、何を手がかりとすればいいのであろうか。第1にすぐ思いつくのは、コンピューターを使用しての学術資料からのリーディング研究の検索であろう。ないしは、手に入る限りのリーディング専門誌、参考書目に目を通すことも考えられる。また、リーディング専門誌にしばしば掲載される、「最近のリーディング研究の動向」というような記事によって、その概要を知ることもありえよう。しかしながら、第1の方法は、「玉石こんこう」誰のためにもならないと思われる論文、研究成果が入り込む余地がある。第2の方法は個人の時間と能力をはるかに超えたものであり、現実的には不可能に近い。また、第3の方法は、時間と手間はさほど取らないが、すべての分野を尽くすことは難しい。いずれも、リーディング研究の動向を知る上では、適当な方略とは言えないのである。つまり、あまりかしこい方法とは言えないのである。

では、どのような方法が現実的に可能であろうか。私は、以上のことを考え、当面の目標を達成する手段として、International Reading Association (IRA) より毎年発行される Sam Weintraub, et al. (Ed) *Annual Summary of Investigations Relating to Reading (ASIRR) July 1, 1994 to June 30, 1995 (1996)* を使用することにした。ASIRR の特性と利用の理由をあげれば、次のようになる。

1. ASIRR は1994年7月1日より1995年6月30日までの1年間に認定された (identified) 英語リーディング研究に関わる研究成果を掲載している。これにより、最新の研究の動向を知りうる。
2. ASIRR に掲載の研究成果にはすべて概要 (summary) がつけられていて、研究の内容を簡潔に知ることができる。
3. ASIRR はリーディング研究の各分野を網羅的に取り扱っている。したがって、通読することにより、どの分野の研究が現時点で最も盛んに行なわれているかを鳥瞰できる。
4. ASIRR には、これは大切なことだが、Sam Weintraub を長とする9人の編集責任者によりスクリーニングされた研究成果が掲載されている。このことは、ある一定の学問的水準を超えた研究のみが選択されたことになり、「玉石こんこう」の危険はまずないと言っていい。

5. ASIRR に掲載の研究結果は、単行本、学会紀要等に加えて、300種以上のリーディング専門学術誌の中から収集されており、まず重要論文の見落としということは考えられない。もちろん、これらは、英語リーディング研究における研究成果であるので、発表媒体は基本的には英語である。非英語ではない。このことは、研究の動向を知るうえでは、何ら問題となることはないであろう。

以上が ASIRR の性格と私がこれを使用した理由の主なものである。リーディング研究の動向を概観しうる資料として、これ以上望みうるものは他にないであろう。

ASIRR の内容を次にあげる。全体は6分野に大別されている、各分野ごとの下位区分としての領域の末尾の数字は研究成果の点数 (N) であり、分野ごとに集計している。

Annual Summary of Investigations Relating to Reading July 1, 1994 to June 30, 1995 (1996)

	(N)
I. Summaries of reading research	3
<hr/>	
	3
II. Teacher preparation and practice	
II-1 Behavior, performance, knowledge, practices, effectiveness	16
II-2 Beliefs and attitudes toward reading	14
II-3 Preservice and inservice preparation	20
II-4 Roles	5
II-5 Evaluation of programs and materials	8
<hr/>	
	63
III. Sociology of reading	
III-1 Role and use of mass media	4
III-2 Content analysis of printed materials	16
III-3 Readability, legibility, and typography	2
III-4 Reading interest, preferences, habits	2
III-5 Readership	6
III-6 Library usage and services	2
III-7 Social and cultural influences on reading	2
III-8 Literacy and illiteracy	21
III-9 History of literacy	1
III-10 Newspaper publication	5
III-11 History of newspapers and magazines	2

III-12	Book and magazine publication	5
III-13	Juvenile books and textbooks	2
III-14	Censorship and freedom of the press	7
III-15	Effects of reading	4
III-16	Reaction to prints	7
III-17	Research techniques	1

---

 89

IV.	Physiology and psychology of reading	
IV-1	Physiology of reading	17
IV-2	Sex differences	6
IV-3	Intellectual abilities and reading	4
IV-4	Modes of learning	1
IV-5	Experiments in learning	15
IV-6	Visual perception	7
IV-7	Auditory perception	2
IV-8	Reading and language abilities	18
IV-9	Vocabulary and word identification	15
IV-10	Factors in interpretation	4
IV-11	Oral reading	7
IV-12	Rate of reading	3
IV-13	Other factors related to reading	7
IV-14	Factors related to reading disability	20
IV-15	Sociocultural factors and reading	8
IV-16	Reading interest	11
IV-17	Attitudes and affect toward reading	5
IV-18	Personality, self-concept, and reading	4
IV-19	Readability and legibility	3
IV-20	Literacy acquisition	15
IV-21	Studies on the reading process	16
IV-22	Comprehension research	20
IV-23	Research design	3

---

 211

V.	The teaching of reading	
V-1	Comparative studies	6
V-2	Status of reading instruction	5
V-3	Emergent literacy	4

V-4 Teaching reading — primary grades	13
V-5 Teaching reading — grades 4 to 8	11
V-6 Teaching reading — high school	7
V-7 Teaching reading — college and adult	7
V-8 Instructional materials	5
V-9 Teaching — grouping/school organization	9
V-10 Corrective/remedial instruction	20
V-11 Teaching bilingual and other language learners	8
V-12 Tests and testing	16
V-13 Technology and reading instruction	7
	118
VI. Reading of atypical learners	
VI-1 Visually impaired	5
VI-2 Hearing impaired	3
VI-3 Mentally handicapped	5
VI-4 Neurologically impaired and brain injured	17
VI-5 Other atypical learners	3
	33
	517

これらの研究分野および研究成果の点数により、リーディング研究の動向として、何が言えるのであろうか。以下、分野ごとに、I. Summaries of reading research より VI. Reading of atypical learners まで、繁雑にならない程度にその特長的な内容をのべる。

## 2. 2 研究の動向

### I. Summaries of reading research (リーディング研究の概要)

わずか3点の研究しかない。このことは、研究成果、学術論文等を収集し、一定の基準でその概要を与える作業の困難さを如実に物語っていると言えよう。

### II. Teacher preparation and practice (教師養成および教師論)

II-1 Behavior, performance, knowledge, practices, effectiveness (16), II-2 Beliefs and attitudes toward reading (14), II-3 Preservice and inservice preparation (23) に研究が集中している(かっこの中の数字は、それぞれ研究点数の数字を示す)。これらはどのような研究領域であるかということ、II-1 Behavior, performance, knowledge, practices, effectiveness においては、現実の教室現場における教師のリーディング指導の

あり方、教師の能力を論じている。II-2 Beliefs and attitudes toward reading においては、リーディング指導、学習にたいする教師に意識、態度を、II-3 Preservice and inservice preparation では、文字通り教師養成、研修がテーマである。いずれもリーディング指導を行う教師の論である。いかに良質の教師を養成し、養成された教師がいかに効率的で学習効果の上がる授業を行なうかという、きわめて切実な問題についての研究である。

### III. Sociology of reading (リーディングの社会学)

文章を読むという知的作業は真空の中で行なわれるものではない。読み手は自身の置かれた社会的環境と深いかかわりを持ちながら読みの行為を行なうのである。したがって、読み手がどのような種類の文章を現代という時代の中で読むのか、また読み手の能力はそれにふさわしい適切なレベルまで達しているのか、ということが大きな問題となりうるのである。こう考えると、III-2 Content analysis of printed materials (16)、III-8 Literacy and illiteracy (21)の領域に研究が集中しているのは、ある意味において当然のことであろう。

III-2 Content analysis of printed materials においては、読み手が教室の内外で手に取る教科書、小説、雑誌、新聞等の内容を吟味している。ここでは、イデオロギー、性差別、マスメディアの偏向 (bias) など、きわめて今日的な視点から分析を行なおうとしている。III-8 Literacy and illiteracy は、とくにアメリカにおいて深刻な問題となっている識字、読みの能力に関する領域の研究である。低所得者層、移民層の識字、読みの能力がきわだつて取り上げられている。これも、「リーディングの社会学」の分野の重要な研究テーマである。

### IV. Physiology and psychology of reading (リーディングの生理学および心理学)

この分野は、最近の10余年間、とくに研究が盛んである。心理学、実験心理学、生理学等の関連諸科学においてなされてきた学問的研究成果と知見を多く取り入れ、精神的に研究が行なわれてきた。したがって、この分野が研究点数も一番多く、全体で211点、研究総数517点のほぼ41%を占めている。主要な研究テーマは「リーディングのさい読み手の頭の中ではどのようなことが行なわれているのか」ということである。つまり、読解過程を解明しようという研究である。IV-1 Physiology of reading (17)、IV-5 Experiments in learning (15)、IV-8 Reading and language abilities (18)、IV-9 Vocabulary and word identification (15)、IV-14 Factors related to reading disability (20)、IV-20 Literacy acquisition (15)、IV-21 Studies on the reading process (16)、IV-22 Comprehension research (20) と研究領域も多岐にわたっている。

IV-1 Physiology of reading では、固視 (eye fixation)、視線の跳躍運動 (saccadic eye movement)、色彩知覚等、リーディングのさい「読み手の眼は何を見ているのか」ということが主要な研究領域となっている。IV-5 Experiments in learning では、読み手のテキスト理解にたいするさまざまな実験結果を報告している。これは、長い伝統を持っている研究領域と言っていいていであろう。IV-8 Reading and language abilities はリーディングにおける言語能力を、IV-9 Vocabulary and word identification は語彙能力および語彙学習、習得を研究している領域である。いずれも、外国語として英語を読むというわが国における英語教育にたいして多くの示唆を与えている。

IV-14 Factors related to reading disability は、リーディング能力の低い読み手の実態の研究であり、ほぼ失読症に近い読み手までも取り扱っている。IV-20 Literacy acquisition は、III-8 Literacy and illiteracy と関連のある研究領域であり、IV-21 Studies on the reading process, IV-22 Comprehension research とともに、読みの学習そのものに焦点をあてている。これは、リーディングの指導と表裏をなす重要な研究である。

#### V. The teaching of reading (リーディング指導)

私たち教師が最も興味と関心を持つ分野である。研究点数は118点と、IV. Physiology and psychology of reading に次いで多く、研究総数のほぼ23%を占めている。V-4 Teaching reading — primary grades (13), V-10 Corrective /remedial instruction(20), V-12 Tests and testing (16) が目立って研究が集中している領域である。V-4 Teaching reading — primary grades は、幼稚園より小学校3年生程度までの読みの指導をテーマとしている。興味深いのは、学年が小学校高学年、中学校、高等学校、大学と進むにつれて、研究点数が下降していることである。研究の主力は「学び初め」の入門期に注がれているのである。

V-10 Corrective/remedial instruction は、リーディング能力の習得に困難を持つ学習者にたいする、矯正、補習の指導を取り扱う。見落としてはならない大切な研究領域である。私たち教師にとって考察すべき多くの問題を投げかけてくれる。V-12 Tests and testing は、テストおよび評価、評定に関わる領域で、わが国の英語教育においても「観点別評価」ということが問題となっており、最近関心が高まっている研究テーマである。

#### VI. Reading of atypical learners (養護教育におけるリーディング)

これは、近年除々にはあるが、研究が進んできた領域であるといえよう。将来を期待したいのであるが、残念ながら、研究内容の理解には、私たち英語教師が到底及ばない困難さがつきまとう。大脳生理学、神経学などの医学分野の専門知識が不可欠であるからである。VI-4 Neurologically impaired and brain injured (17)の領域が最も研究点数が多く、脳機能障害、脳損傷を持つ読み手のリーディングを取り扱っている。

さて、リーディング研究の動向と大要を知るべく ASIRR の研究成果より、突出した点数を持つ領域のみを取り上げ、その大体をのべてきた。では、リーディング研究の現時点での動向というものを一口で言うとするれば、どのようなことになるのであろうか。それは、

教師論、教師養成論がやや多く、リーディング社会学論は、読み手が手にする印刷物のイデオロギーを含む内容論、識字、読み能力論に研究が集中している。また、読解過程論、リーディング指導論は長い歴史をもち研究の層も厚く、リーディング研究の大半を占めている。そして、養護教育におけるリーディング論も次第にその数を増している。

ということになるであろう。しかしながら、これだけの結論だけならば、「たいくつなテーマについてのたいくつな結論」ということで終わってしまうであろう。もう一歩進んでこ

の結論を考えてみたい。まず、英語教育という視点から光を当てれば、何が言えるであろうか。

### 3. 研究の問題点

#### 3. 1. 英語教育の視点

英語教育におけるリーディング指導、学習という観点から、リーディング研究を分別するとすれば、次の4つの分野にわたるといえよう (Davies, 1995)。

- (1) 読み手の読みの行動に関する研究 (studying reading behavior)
- (2) 読解過程に関する理論的研究 (studying the reading process: models of reading)
- (3) リーディング指導に関する研究 (studying teaching of reading)
- (4) テキストの分析に関する研究 (studying describing and analysing texts)

これら4つの研究分野は次のような特性を持つといえよう。

(1) 読み手の読みの行動に関する研究は、(2) 読解過程の理論的研究に比べてインフォーマルな研究ではあるが、私たち英語教師にとってなじみ深いものである。教室の中で、ないしは教室の外で学習者はどのような種類の英語を読んでいるのか、またどのような読みの行動 (reading behavior) を行なっているのか、私たちはこの目でじかに観察できる分野であり、学習者のリーディングの生の実態にせまることが可能である。研究結果は、教室外での多読指導、読后感想文の指導等の指針として、すぐ役に立つものである。また、教室内におけるリーディング指導において教師が常に念頭に置くべき第一級の資料となるものである。加えて、理論的研究への第一歩となりえよう。

(2) 読解過程に関する理論的研究は、「リーディングのさい、読み手の頭の中ではどのようなことが行なわれているのか」という基本的な問いに答えようとする研究である。さきにも触れたように、言語心理学、実験心理学等を理論的、学問的背景とし、これらの研究方法を用い、さまざまな読解過程理論 (model) が導きだされる。フォーマルな研究分野である。スキーマ理論、トップダウン・ボトムアップ読解過程論などがそれである。実験的環境という、いわば密室の中で一定の被験者を対象として研究、実験がおこなわれる。現在、応接のいとまがない程の研究結果が発表されていることは IV. Physiology and psychology of reading (リーディングの生理学および心理学) の項で見たとおりである。わが国においても最も研究がさかんであると言っていい分野である。

(3) リーディング指導に関する研究は、(1) の読み手の読みの行動に関する研究とあいまって、長い伝統を持っている。英語教育が始まったその日から、リーディング指導について、私たちは試行錯誤してきたはずである。今後は、コミュニケーションという視点からリーディング指導を考えていくべきであろう。コミュニケーションとはオーラルによるばかりではない。人の書いたメモ、手紙を読むのも、Eメール/インターネットによるコンピューターのディスプレイを読むのも、当然ながらコミュニケーションの活動であるからである。



最後の、(4) テキストの分析に関する研究は、読み手が読むテキストそのものの分析研究である。リーディングという言語活動においては、読み手と書き手が、テキストを媒体としてコミュニケーションを行なっていると見なすことができる。したがって、リーディングが成立するためには、読み手、書き手、そしてテキストが存在しなければならない。この必須条件であるテキストの分析研究は、リーディング研究の中で重要な位置を占めているのである。

### 3. 2. 研究の問題点

さて、これら4つの分野に、先に述べた ASIRR のリーディング研究分野を当てはめるとどのようなことになるだろうか。

(1) 読み手の読みの行動に関する研究：

Ⅲ. Sociology of reading

(2) 読解過程に関する理論的研究：

Ⅳ. Physiology and psychology of reading

Ⅳ. Reading of atypical learners

(3) リーディング指導に関する研究：

Ⅱ. Teacher preparation and practice

V. The teaching of reading

(4) テキストの分析に関する研究：

このようにみると、(4)のテキストの分析に関する研究にあてはまる分野が存在せず、欠落したままになることになる。もちろん、各分野の中から、強いてこの項目に入りうる領域もありえよう。たとえば、

Ⅲ-2 Content analysis of printed materials

Ⅲ-13 Juvenile books and textbooks

Ⅳ-19 Readability and legibility

V-8 Instructional materials

などであろう。だが、詳細に見ると、どれもテキストの分析に関する研究の範ちゅうに入れるには無理があるのである。一例をあげると、V-8 Instructional materials は、確かにリーディング教材論ではあり、テキスト分析に最も関係がありそうであるが、これは教材の可否、教材の構成を論じているのみである。テキスト分析研究とはいいがたいであろう。テキスト分析研究は、さきに触れたように、リーディング研究の根幹をなす研究分野である。にもかかわらず、すでに見たように、その研究成果たるや微々たるものである。とくに、

(2) の読解過程に関する理論的研究において、被験者にあたえられるテキストにたいしてじゅうぶんな分析がなされているとは、到底言えないのである。読解過程に関する研究において、変数 (Variable) としてのテキストという観点が希薄なのである。それはなぜか。テキストを分析する基準、手順についての何らかの明確な理論ないしは、わく組みが欠如しているためである。テキスト—教材—を、今一度新たな角度から検討する方法が求められている。今後、私たちの重要な研究テーマとならなければならないであろう。

#### 4. テキスト分析の方法

リーディング研究の根幹をなしながら、なお分析研究の基準、手順についての理論、わく組みすら明確でないのならば、私たちはただ手を拱ねていなければならないのだろうか。そうではない、どこからか手をつけるべきであろう。では、どこから始めるべきなのか。私には、ド・ボウグランド、ドレスラー (de Beaugrande, R. and W. Dressler, 1981) の示す「テキスト性の7つの基準」(seven standards of textuality) がテキスト分析の方法論として大きな理論的わく組みを与えてくれそうである。まず、それらをあげる。

- (1) 結束構造 (cohesion)
- (2) 結束性 (coherence)
- (3) 意図性 (intentionality)
- (4) 容認性 (acceptability)
- (5) 情報性 (informativity)
- (6) 場面性 (situationality)
- (7) テキスト間相互関連性 (intertextuality)

テキストがテキストとして成り立ちうるには、上の基準のどれもすべて満たされなければならない。どれ1つも欠かすことはできないのである。言いかえるとこれらの基準がテキスト、非テキストのいわば判別式となりうるのである。あるテキストを分析する場合、まずこの基準に照らし合わせることから分析をスタートさせることは可能であり、またじゅうぶん理にかなうことなのである。

テキスト性の基準のうち(1) 結束構造 (cohesion), (5) 情報性 (informativity) についての中学校リーディング教材に関する具体的な考察は千々岩 (1996, 1994) にある。ここでは、これら基準の意味するところのみを述べる。

##### (1) 結束構造

Halliday and Hasan (1976, p.10) が定義するように、「結束構造とは、[テキスト内の] ある部分とそれに先行するある部分を結束させうる可能性の範囲のこと」(Cohesion refers to the range of possibilities that exist for linking something with what has gone before) をいう。これはド・ボウグランド、ドレスラーの定義より狭義ではあるが、まずこう考えるほうが、具体的なテキスト分析には整合性があると言っている。つまり、テキストには文と文を結びつける内的構造が存在するのである。それには、指示 (reference),

代入および省略 (substitution and ellipsis), 接続 (conjunction), 語彙結束 (lexical cohesion) の5つの範ちゅうが認められる。

## (2) 結束性

ある文章がテキストとして理解されるためには、その表わす意味が首尾一貫したものでなくてはならない。たとえ、結束構造において明示されなくても、コンテキスト、読み手の当該テキストにたいする背景的知識によって、一貫性をもった意味解釈を許すのである。たとえば、

A: Could you give me a lift?

B: Sorry, I'm visiting my sister.

(A: 家まで乗せて行ってくれないか

B: 悪いけど、妹のところへ行くんだ)

この対話において、Aの発話とBの発話のあいだには、テキスト内において何ら結束構造は存在しない。では、なぜAはBの発話を理解できるのか。それは Bの妹がAの住む家とは反対の方角に住んでいるということ、Aが知っているという背景的知識により、結束性を持つからである。

## (3) 意図性

(1) 結束構造, (2) 結束性を効果的に用いて、書き手が伝えようとするメッセージをいかにテキストに具現するかということである。もし、書き手の意図が、テキストの中に物理的存在としての文章としての的確に表現されなければ、そのテキストはまったく意味をなさないものになってしまうのである。

## (4) 容認性

(3) の意図性と表裏をなす。テキストの中に、いかに書き手の意図が余すところなく、まぎれもなく具現されていても、読み手にとって受容、容認できぬものであれば、そのテキストは読み手にとって、無縁の単なるインクのシミであるにすぎない。つまり、書き手と読み手のテキストを通じてのコミュニケーションは成立しないということになるのである。

## (5) 情報性

あるテキストを手にした場合、その形式 (form) と内容 (content) にたいして、読み手がどの程度予測可能か予測不可能であるのか、ないしは既知か未知かということに関わってくる問題である。既知項目が多ければ予測可能性は高いということになり、未知項目が多ければ予測可能性は低いということになる。

## (6) 場面性

テキストはそれに適切なコンテキストの中、つまり場面性を持ちえてこそ、確実にその

メッセージは伝わるのである。たとえば、

Slow - Children at Play

という掲示があったとしよう。これが、正確に読み手にとって「子供たちが遊んでいます、徐行運転してください」という意味に理解されるためには、適切な場面性—遊園地の近くとか—の存在が必要なのである。もし場面性が欠如していれば、リーディングは成立しないのである。

(7) テキスト間相互関連性

あるテキストが的確に理解されるには、読み手はそのテキスト以外の関連性のあるテキストについての知識を持つことが不可欠である。一例を示すと、

Resume Speed

(原速に戻ってよし)

という道路標識が、まぎれもなく読み手に理解されるためには、それ以前に標識、たとえば、

Go Slower

(速度落とせ)

というテキストの存在が必要である。このことは、ある専門領域のテキストを何ら予備知識なしに読んでも、意味不明ということになるのと同じである。読み手にいきなり未知の分野のテキストをあたえても、リーディングは不可能なのである。

## 5. おわりに

私は本稿において、英語教育の視点から見たリーディング研究の動向とその問題点を考えてきた。リーディング研究は、他の言語活動の分野に比して、長い歴史と層の厚さがある。また、広汎な領域を研究対象としている。しかしながら、現時点での研究の動向を見ると、やはりそこにはある片寄りがある。ASIRR という良質ではあるが限られた窓を通してみても、どの分野も等質な力点が置かれているとは言い難い。まず、顕著な片寄りは、テキスト分析研究が実に微々たるものであることに表われている。その主な理由は何か。

まず、考えられるのは、方法論が未だ確立していないということであろう。しかし、このことは、他の学問分野においても同じ状況であろうし、別にテキスト分析研究の分野に限ったことではない。だが、私たちはどこからか始めなければならない。ド・ボウグランド、ドレスラーの提示する「テキスト性の7つの基準」を手がかりとしてテキスト分析研究は可能ではないのか。

テキスト分析の領域は、教科書に使用されている言語 (language of textbooks), ジャンル (genre), 文体論 (stylistics) から、修辞機能 (rhetorical function), 修辞形式

(rhetorical pattern) 等々多様で幅広い。しかしながら、英語教育という、きわめて現実的な立場からみれば、テキスト分析はぜひ研究されなければならない。語用論 (pragmatics)、談話分析 (discourse analysis) という方向からも研究は可能であろう。今後のリーディング研究はテキスト分析をもっと中心に据えるべきではなからうか。

#### 参考書目

- de Beaugrande, R. and W. Dressler (1981) *Introduction to Text Linguistics*, Longman.
- Davies, F. (1995) *Introducing Reading*, Penguin.
- Halliday, M. A. K. and R. Hasan. (1976) *Cohesion in English*, Longman.
- Richards, Jack et al. (1985) *Longman Dictionary of Applied Linguistics*, Longman.
- Weintraub, S. et al. (Ed) (1996) *Annual Summary of Investigations Relating to Reading July 1, 1994 to June 30, 1995*, IRA.
- 千々岩佳史 (1994) 「中学英語リーディング教材におけるテキスト性(1)―情報性に関して―」『岩手大学教育学部研究年報』第54巻. 第2号.
- (1996) 「中学英語リーディング教材におけるテキスト性(2)―結束構造に関して―」『岩手大学教育学部研究年報』第56巻. 第1号.